

明星大学蔵 奈良絵巻『十番切』釈文

柴田雅生*

奈良絵巻『十番切』は、『曾我物語』に由来する幸若舞の詞章を美麗な絵巻に仕立てたもので、後世の曾我物に大きな影響を与えた作品である。

ここに翻字するのは、本学青梅校図書館に所蔵される奈良絵巻『十番切』の全文である。『十番切』の奈良絵巻は本書の他に存在が知られていない。原態を尊重しつつも読みやすさを優先し、釈文として掲載することとした。また釈文の末尾に挿絵をまとめて白黒で掲載した。

書誌

体裁 二巻。紙高三三・一糎、長さ（上巻）一二米六二・四糎（下巻）

一一米三八・六糎。江戸時代前期の写本と見られる。

表紙 上下巻とも、朝顔に兔を配した文様の練色地緞子表紙。見返しは金紙。

料紙 金泥による草木の下絵を有する鳥の子紙。紙背にも金の切箔を散

らす。

外題 （上巻）「十番切 上」

（下巻）「十番切 下」

本文字高 約二八糎。

挿絵 合計十三図。

上巻 六図

下巻 七図

備考一 石川透氏の分類（石川透「奈良絵本・絵巻の制作」『奈良絵本・絵巻の生成』〈三弥井書店、二〇〇三年八月〉）に従えば、縦型特大型に属する。

備考二 本文は寛永版本とおおむね一致するが、細かい異同が非常に多い。

また、挿絵を配置するための配慮か、挿絵の前または後に散らし書きの部分がある。

備考三 挿絵は土佐派の流れを汲む絵師の筆になると思われる。背景や着物の模様、端役の人物といった細部までを精密に描き、霞には金箔を散らす。

凡例

一 本文・挿絵を交互に配置する順に従って、上下巻ごとに通し番号を振り、該当部分の前に（上・詞一）（上・絵一）などと示した。挿絵はまとめて末尾に掲載した。

二 改行は原本に従う。散らし書きの部分は原本の配置を概略で再現す

るよう努めた。

三 本文は可能な限り原本に忠実に翻字し、不審の箇所があっても、みだりにこれを改めることはしなかった。不審の箇所については、(ママ)を右傍に付した。

四 翻字は、現行の文字字体に翻刻することを基本としたが、「經」「當」などの旧字体等の異体字を残したところがある。変体仮名については「ハ」の字体を残した。

五 「見」「氣」などの、漢字か仮名か判別しにくいものについては、字義に即した使い方の場合に限り漢字として翻字した。

六 繰り返し符号(踊り字)は、「ゝ・ゞ」「く・く」(くの字点)「々」を用いた。「と(二の字点)」は用いず、「々」で代用した。

七 原文には濁点や句読点、振り仮名・振り漢字などは付されていない。翻字に際しては、読みやすさを優先させて、便宜的に、句読点・濁点・会話部分などを示す鉤括弧などを加えた。また、仮名が連続して文脈が読み取りにくい場合には、振り漢字を() に入れた加えた。

八 挿絵計十三図のうち、三図(上・絵三、上・絵四、下・絵一)は、他の挿絵の二倍弱の長さを有する。他の挿絵と同じ縮尺を維持するため、左右に分割し、通し番号の後に(右)(左)を付記した。

釈文

上巻

(上・詞一)
けんきう四年五月廿八日の夜半ば
かりの事なるに、曾我きやうだいの
人々ハ、親のかたきすけつねをおもひ
のまゝにうちすまし、小柴のかげにざ
つとひき、しばらくいきをつぎたまふ。
すけなりおほせけるやうハ、「本望をバ
とげぬ。いざや、こゝにてはらをきらん」。時
宗うけたまはり、「御でうもつともにて候へ
ども、とてもしぜん命にて、御料を一刀
うらみ申、名を後代にのこすべし。
いかゞ」と申たりければ、すけなりきこ
しめされて、「げに、これはいはれたり。
たゞし、おやのかたきにとどめをさして
ありけるか」。時宗うけたまはり、「あれ程
になり候らいて、なにのしさいの候べき」。
すけなりきこしめされて、「それはさも
なし、時宗。あけてじつけんあらんとき、
『あはてたるか、おくれたるか。とどめをさゝで
うちすてにしたり』なんどいはいはれなば、
かばねのうへのちじよくたるべし、いかゞハ

せん」^(儀)とのたまへば、「そのぎにて候ハゞ、しば
らく御まち候へ。とゞめをさしてまいらん」と

(上・絵一)

(上・詞二)

ありし^(所)ところに立かゑり、たいまつ^(統松)つ
とふりたてゝ、すけつね^(祐經)をみてあれば、
^(跡)あともまくらもみもわかず。されども、
^(死骸)しがいをひきあげて、むなしき^(顔)かほ
をつく^(泉)と見て、「かまへてめいどく^(冥途)ハう
せん^(罪科)まで、我等^(只今)うらむることなかれ。日比
つくりし^(父)つみとがの、たゞいまむくうと
おもふべし。われらがちゝの河津殿に、^(手)た
むけん^(名刀)ためのめいたうなり。さこそそん
れう河津殿、うれしくおぼしめさるらん。
いひもあへず、時宗^(嚴)、こしの刀^(馬手)をするりと
ぬき、弓手^(耳)のみゝの下よりもめてへと
れと、三刀^(刺)さす。刀目^(重)がかさなりて、口と
ひとつに成にけり。

(上・絵二)

(上・詞三)

あけてじ^(美)つけん^(検)ありし時、^(宵)「よひのざしき^(座敷)の

ざう^(雑言)ごんに、口をさ^(裂)かれけるか」と、御ひやうぢ^(評)
やう^(定)ハとり^(終)なり。されども、遊女式人が、^(始)はじ
めを^(終)ハりをかたるにぞ、とゞめにこそは
なり^(敵討)にけれ。よひにははれてありけれども、
かたき^(敵討)うちける其時刻に、空かきくも
り、五月雨^(卯花)うのはなくだしふりにふる。
つじ^(辻)くのかざり火、一度にばつときえけ
れバ、東西^(俄)にわか^(閤)にやみとなつて、ぜんご
もさらにわきまへず。されども、おもひきり
ぬるみち、大音^(寮)あげて申す。「たゞいま、
御れ^(寮)うのかり屋の御前にて、おやのかたき助^(親敵)
つね^(経)をうつて出るつはものを、いかなるものと
思召。伊豆の国の住人伊藤がまご、河津が子、
十郎^(郎)すけなり、五郎時宗、我等なり。當君の御
内に弓取ハおはせぬか。など出合てうちとゞめ、
名を後代にあげたまハぬぞ」と、こゑ^(呼)く
によばる。くらさはくらし、雨はふる。御
陣^(俄)にわか^(震動)にしんどうし、弓一張、太刀一ふりに、
二人三人とりついて、我が人のとうばひやう。
つなぎ馬^(繫)にのりながら、むちをうつものも
あり、みかたどしがをりあひて、かたきとおもふ
者もあり。前後^(下)ふかくにひしめいて、うゑ
をしたへとかへしけり。されども、一番にたい
らこの平^(樂)まのぜう^(馬)となつて、「夜^(九)うちは
何者ぞ。われ^(我)くが目のまへにて、らうぜき^(狼藉)

をばせさすまじい。手なみのほどをみ^(見)
 せん^(成)」とて、おごゑをあげて切て出る。すけ^(助)
 なり、御覧じて、「かほどにおほき人中に、
 老人^(名乗)なのつて出るこそ、たぐひすくなき^{(類)(少)}
 弓^(取)とりなれ。曾我の十郎^(郎)、これにあり。うけて
 みよ^(受)」というまゝに、小柴のかけよりつと
 出て、もつてひらいて、ちやうどうつ。弓手^(開)
 のうでくびうちをとされて、ことばにハにぎ^{(腕)(打)(落)}
 りけり、はや、まくのうちゑぞひきにける。^(幕)
 二ばんにあいきやうの三郎^{(番)(愛)(甲)(郎)(名乗)}となつて、五郎
 にむずとわたり相、こびんをきられひいて入。^(渡)
 三ばんに御所がたのくろや五^{(番)(方)(黒弥)(名乗)}となつて、
 十郎殿にわたりあい、かたさききられひ^{(郎)(渡)(肩)(先)(切)}
 いて入。

(上・絵三)

(上・詞四)
 四番^(茂木)にもてぎ殿、五郎にむずとわたりあい、
 ひざのくちをわられて、御内をさして引^{(膝)(口)(破)}
 たまふ。五ばんのたびには、伊勢の国の住人^{(吉)(番)(度)(師)(重)}
 に、よし田の三郎^{(高)(股)}もろしげ、十郎どのにわたり
 あひ、たかも、ながれひいて入。六番のたびに^(名乗)
 ハ、吉川となつて、五郎にむずとわたり相、
 もろひさながれひいて入。七番にハしなが^{(諸)(膝)}

川^(名乗)わたなのつて、十郎殿にわたりあい、めてのこ^{(馬手)(小)}
 わきをきられて、まくのうちへぞひきに^{(脇)(切)(幕)(内)(引)}
 ける。八番のたびにハ、かいの国の住人に、
 市川^{(別)(当)}のべつたう太郎たぐずみ、大おんあ^{(忠)(澄)(音)}
 げていひけるは、「夜討といはんに、なに
 ほどの事のあるべき」と、おごゑをあげて^(声)
 きつて出る。時宗、これをき、^{(音)(聞)(確)(水)(峠)}「なんぢハ、
 をとにきこえたるうすいのたうげなんど^{(能)(能)(能)}
 にて、ぬすみこそふなりとも、はれわざ^{(切)(合)(初)}
 のきりあいハ、これはじめにてあらんに、
 手なみみせん^{(並)(見)}」といふまゝに、もつてひらひ^(開)
 て、ちやうどうつ。ほそくびちうにうちをと^{(打)(細)(首)(宙)(打)(落)}
 されて、あしたの露とぞきえにける。^(朝)
 九番につくしむしや、うすきの七郎ため^{(筑紫)(武者)(白杵)(為)}
 しげ、十郎殿にわたりあい、まつかうわれ、
 ひいて入。十ばんのたびには、伊豆国の住人^{(三)(番)(忠)(綱)(音)}
 に、にたんの四郎たぐつな、大おんあ^(音)げていひ
 けるハ、「なにさま、東西くらうして、ものあ
 ひの見へぬに、たいまついだせ」とよば、つ^{(続)(松)(出)(呼)}
 たり。すけなり、きこしめし、「たいまつこ^{(助)(成)(聞)(目)(続)(松)(好)}
 のみするやつに、手なみのほどをみせん」とて、
 入ちがえてきりむすぶ。天地にひらめく太刀^{(違)(切)(結)}
 かげハ、たゞ電光のごとくなり。そのひまに^{(松)(差)}
 たいまつをわれもくとさし出す。えびら、うつ^{(続)(松)(差)(傘)}
 ぽ、みの、かさ、ましてからかさななどをバ、よき

(上・絵四)

(統 松) たいまつと火をつくる。まんどうゑにハこと
(万 灯 会) (異)
ならず。いとゞ勇兄弟が、この火のひかりに
(力) (得) (切) ちからをゑて、さんく(虎)にきつたりけり。
龍が雲をひきつれ、とらが風に毛をふ
(勢) (勢) (勢) はんくわいがほこをふり、長良が
いきほひも、これにはいかでまつさるべき。
その夜、五郎が手につけ、五十一人に手をお
(食) (死) おうする。直にしろはたゞひとり、別當
太郎ばかりなり。「とても今夜はすこす
(罪) (作) (思) まじ。つみつくり」におもひければ、人を
(更) (切) (乗) さらにきりとめず。名字を名のつ
て出るをこそ、十人とはしるされけ
(兄 弟) (捨) (数) れ。きやうだいが手にかけて、やみうちの
(助 成) すて刀、かすをもしらぬ所なり。さて
(先 途) すけなりと忠綱、こゝをせんとくかひ
けるが、忠綱、すこし手おひ、家までぞ
十郎殿いとま申て「さらバ」とて

とつてかへして、

ひいて引。祐成

(統) つゞひて、

おつかけなさけ

なし。にたん、

(上・詞五)

「とても今夜はすこすまじい。名もなき
(過) (難 兵) 以下のさうひやうのその手にかけて、ころ
さんより、かへしあわせてせうぶをせよ、
忠綱」とて、おつかくる。二たん、「げにも」といふ
まゝに、とつてなをして切むす。少あしだち
(片 下) (上) かたさがり、うわ手になつて十郎殿、にたん
(下) (走) を下へおいをろさんと、はしりかゝつてうつ
(太 忠 綱) 太刀を、たゞつな、さらりとうけながし、つか
(足) (膝) (口) をついて、すそをなぐ。十郎のめてのちか
(足) (膝) (口) らあし、ひざのくちをさし下げ、づんど
(切) きつてぞおとしける。弓手の足ばかり
にて、半時おどつてたゝかうた。これや
(陵 王) (向) この、れうわうの暮日にむかうほこのて、
(返) (一 踊) 入目をかへしひとおどり、うしろをふせぎ
(碎) (戦) こす刀、百手をくだきたゝかえど、弓手の
足ばかりにて、さのみはいかでこらうべき。
(大 屈) いぬいにどうどまろび、「あたりに五郎や
(助 成) (只 今) ある。すけなりこそたゞいま、にたんに
(合) (討) あいてうたれさえ。おなじよみぢといひ
ながら、忠綱にあひてうたるれば、うらみ
(更) (思) とハさらにおもはず。ごへんハ命を全して、
(参) 君の御前にまいりつゝ、われらがありさま
(死) (早) (首 取) 申てしね。はやくびとれや、忠綱。にたん、
(首) (討 落) くびをうちおとす。まんずる年は貳十二、

おしまぬものはなかりけり。去間、時宗(備者)
 ハ大ぜい(勢)の中にてた、かひけるが、すけなり(助成)
 のさいご(最期)のこと葉をき、はやうつたちも(言聞)
 よはり、ぜんごふ(前後)ふかくになりければ、「かくて(叶)
 ハかなはじ」とおもひ、仇を四方へおつちらし、
 みうちをさしてきつて入。爰に御所の
 五郎丸と申て、十八さい(歳)になりけるが、八十
 五人が力なり、はらまきのそのうへにうす(腹巻)
 ぎぬかづき、かみゆりさげ、とある所に
 ひつそうて、今やおそしとあいまつる。
 これをばゆめにもしらずして、つま戸を
 ばつとけやぶつて、御内をさしてきつ(蹴破)
 て入。五郎丸やりす(過)ごし、「ゑたりや、あふ」と
 いふまゝに、ゆん(弓手)ですがりにむずとだく。
 時宗、これをみて、「あら、口惜や。女とおもひ(見損)
 みそんじて、いだかれぬるよ」とこうくわい
 す。されども、ものゝかず(物)にせず、ちうに
 づんどひつたてゝ、七八間ははしりけり。
 五郎丸、これを見て、かなハじとぞんずれ(引立)
 バ、「夜討をばくみとめたるぞ。おりあへやつ(組止)
 とよバはつたり。其こゑにしがつて、
 我もおぼしき大力、七八人おりあひ、手取(足取)
 あしとり、なわかけて、大しやうどのへおつた
 つる。むね(無念)たぐいはまさりけり。さるあいだ、
 よりとも、夜うちまぢかくまいるよしを

きこしめし、御きせながをめされ、小長刀
 ひきずつて、ゆるぎ出させたまふ。爰に、
 おほともの市法師と申て、九つになり
 けるわらハ、君の御前にかしこまり、
 「さかしき申事にて候へども、すでに
 君ハせいしやうぐんと御わたり候へば、
 野心の者ななどをば、いながらせいし
 たまふべきに、かほどの事ななどに
 御手をおろさせたまはん事、

候べき」と、とどめ申
 たりければ、

(上・絵五)

(上・詞六)

頼朝、「げにも」とおぼしめし、とどまりた
 まふ所に、あんのごとく、夜討からめとつ
 て、庭上にひつすゆる。よりとも、御らんあつ
 て、「いしくも申たる市法師かな。ち、
 おほとものがつたへき、さこそよるこび申さん
 に、ゑぼし子にせん」とのたまひて、おほとも
 の左近の将監よしなをとめされつゝ、大
 すみ、さつまをくださるゝ。ときのめんぼく、
 世のきこへ、なに事かこれにまさるべき。去

間、^(頼朝)よりとも、^(御対面)ごたいめんの^(為)そのために、^(責)あを
^(狩衣)かりぎぬに^(立烏帽子)たてゑぼしめし、^(広)ひろびさし
 まで御出あつて、「夜討^(召)はいづくにぞ。ち
 かうめせ。うけたまはる」と申て、^(秋)はぎがこ
^(坪)つぽにひつすゆる。頼朝、御覽あつて、「曾
 我の五郎時宗とは、^(汝)なんぢが事か」「さん
 候」。「親のかたき、^(祐)すけつねを^(経)うつ^(討)はだうり
 といひながら、京、^(鎌倉)かまくらの^(下)おりの^(上)ぼり、^(座)道の
^(末)すゑに^(討)てもうたずし、^(祝)頼朝が^(座)いわるのざ
 しきに^(敷)血をあゑすでう、^(謂)いはれなし。こ
 れ、ひとつ仇ならば、^(祐)すけつね^(経)老人をこそ
^(討)うつべきに、^(当番)たうばんの^(者共)ものどもに手を
^(多)おほく^(負)おうするでう、^(謂)いわれなし。これひ
 とつかたきうつての^(頼朝)其後、^(敵)頼朝が^(内所)内所
 をさしてきり入。よりともにてきをなす
^(条)でうい^(謂)われなし。とく、^(祐)申候へ。時宗うけ
^(上)たまはり、「さん候。^(者)すけつね^(多)ハ、^(召)京、^(使)鎌倉のお
^(打)りの^(時)ぼりにも、^(者)よきもの^(多)あまためしつかひ、
^(打)うつときハ^(時)五十騎、^(打)百騎、^(時)うたぬときも^(不審)二十き、
^(打)三十騎に^(劣)ハをとらず。^(我)われら^(兄弟)ハ君の^(弟)御ふしんを
^(蒙)かうむり、^(見)身ハ^(者)独身となりはて、^(付)おとしい
 より^(見)外みつくもの^(者)もなきにより、^(付)つきそひ
^(狩)まいり^(倉)ねらへども、^(得)折を^(得)ゑざれば、^(討)うちも^(得)ゑず。
 此^(狩)かりくらの^(人)ごみを^(込)よき^(存)折からとぞんじ、
^(紛)まぎれいつてうつて候。御ちやうのごとく、^(予)か

ねて^(祐)ハすけつね^(経)老人をこそうつべき
 とぞんじて候らひしに、^(存)當番^(面)処のめんく
 が、^(乗)なかく^(足)に^(踏)名のり出、^(病)おくびやうが^(刀)たなつか
 うて、^(逃)にげあし^(憎)ふむが^(威)にくさに、^(威)おどしの
 ために^(重)太刀風を^(恩)おうせ候らひつるなり。
^(重)ぢうおんを^(助)正にかうむり、^(妻)さいしを^(扶持)ふち
 し、^(助)身を^(方)たすけ、^(方)人となるかたが、
 これ程に^(誰)御所中へ^(進)夜討の^(乱)入てみだるゝ
 に、^(誰)たれこそ^(進)すゝ^(進)み命を^(御)すて君の
^(前)ぜんに^(立)まかり^(立)たゝんと^(者)仕るもの^(者)もなし。
^(外)とざまなれども、^(立)に^(者)たんと、^(者)御内の^(者)五郎丸
 より外、^(立)御用に^(者)たつべきもの^(者)ハなし。御
 一族にて^(口)おハしますも、^(敵)てきの^(敵)四郎殿こそ
^(口)ひざのくちを^(破)わられて、^(外)足が^(外)かなはでおひ
^(実)きあれ。その^(検)ほかの^(向)手を^(斑)いども、^(色)みなめし出
^(逃)しじつけんあれ。むかうきすは^(病)よもあらじ。
^(逃)みなに^(原)げ疵にて^(病)候べし。かゝる^(病)おくびやう
 なるや^(奴)つばらに、^(少)あつたらしき^(少)御所領を
^(御芳志)たづらに^(賜)たばんより、^(少)我等に^(少)すこし下され、
^(御芳志)ごはうしに^(逃)あづからば、^(逃)これほどまでは
 よもに^(逃)げじ。たとへば、^(子孫)祖父^(我等)伊藤ハ、^(不)不
 忠の^(御憎)者にて^(御憎)候へば、^(道)しそん^(道)われらに^(道)いたる
 まで、^(書)おにくみあるは^(道)御だうり。さりながら、
^(書)念所には「怒りを^(絶)たて。恩に^(報)むくへば、^(報)仇も
^(味方)みかたとなる。親子兄弟なれども、^(味方)欲心

内にふくめば、^(外)とにてきたう^(敵)ととかれたり。^(説)

祖父伊藤もひがごとなし。^(時)むかし、源平両

家のとき、天下の弓とり、^(筋)二ちやうの弓に

一すぢのつるをかけわづらい、^(弦)きのふ源氏へ

ひく弓を、^(引)けふハまたひきかへて、平家に

ひくやからもあり。^(弓)かやうに人ハせし

かども、伊藤は心ふたつなくきて、^(取)

弓箭をとりしなり。^(者)かやうに弓や

取ものハ、^(者)たのもしき弓とり、^(取)たう

ぜんとこれを申なり。^(千)それに、伊藤が

し^(子孫)そんをばうとみはてさせたまひ

て、^(命)めいをつぐべきたよりなし。

籠鳥の雲をこひ、^(鳥)壺中魚の、^(魚)わ

づかに^(生)泡にいきつぐふせいにて、

いきて^(死)かひなきうき身となり、^(及)と

てもがし^(死)におよばんより、^(討)おやのかた

きとうちじにして、^(死)名を後代に

あげんため、^(華)我君」とこそ申けれ。

(上・絵六)

(下・詞一)

頼朝、^(開)きこしめされて、^(召)「あふ、よの事

さてをきぬ。^(討)仇うつての其後、^(頼朝)よりとも

が内所をさしてきり入、^(切)よりともにてき

をなす^(条)でういわれなし。^(謂)とくく申候へ。」

時宗うけたまはり、^(承)「さん候。御たづねな

れば申べし。たとへば、祖父伊藤ハ、^(名)

不忠の者にて候ども、^(子孫)なにある者

のし^(孫)そんなれば、^(出)いかでかたやしはてん

と、二人に一人をもめし^(命)いだされ、^(地)けん

めいのちに、^(少)すこしなりともあんど

をなしたまはらば、^(討)たとへすけつね

うちたくとも、^(慰)おもひこらへて、本領に

なぐさみても^(過)すぎぬべし。^(命)されば、弓取

の命にかへて^(惜)おしきは、^(懸)けんめいの本領

なり。それに、^(少)すこしものこらずめし上ら

るゝのみならず、^(円)あまつさえすけつね

に^(上)一ゑんに下され、^(見)うへみぬわしとふる

まひし、^(舞)かゝるうらみのかずくの、そ

のみなもとを^(源)たづねるに、^(止)君の御身

にとどめたり。^(祐)すけつねよりもさきに

ぞと、心をかけ申せしに、^(立)それに手

に^(者)たつものもなし。五郎丸、^(衣)きぬかつ

き、^(髪)かみゆりさげてありつるを、^(下)女と

おもひ、^(思)見^(損)そんじて、^(左)さうなくとられて

候ぞや。五郎丸だになかりせば、^(危)あつ

ばれ、君の御命ハあやうかりつる

ものをや」。

(下・絵一)

(下・詞二)

頼朝、きこしめされて、「あつぱれ、大かう
 のものかな。たとひ、さありとも、我まへ
 にては、さなしとこそ申すべきに、おも
 ひの色をのこさず申つるこそ、しんべう
 なれ。たゞし、おやのかたきをうたんとて、
 継父會我にしらせるか。京の小次郎、
 越後のぜんじ、二のみやのあねむこ、母にハ
 しらせざりけるか。とくく申候へ。時宗う
 けたまはり、「さん候。小次郎ハ本所にしこ
 うつかまつり、ひまなき身にて候へば、
 よりあふ事なきにより、しらする事も
 候はず。越後のぜんじは、法師の身にて
 きやうよみ、念仏申、おやの跡とふその子
 を、ころしてなにせんと、しらする事も
 候はず。二のみやのあねむこは、よしなきこ
 じうとにくみし、一所けんめい、うしなはんと、
 よも申さじとぞんじ、しらする事も候はず。
 母にはしらせたく候ひつれども、年よりあ
 とにのこりゐて、わかき子どもを出し
 たて、ものおもハぬとゐうおやの、よに
 ハあらじとぞんじ、しらする事候はず。

明星大学蔵 奈良絵巻『十番切』釈文

柴田雅生

継父はなさぬ中、継子継母のむかし
 より、中よき事のあらざれば、しらせず
 とこそ申けれ。「今ハとうべき事もなし。
 はやく、いとまとらせよ」と、おほせ出され
 けるところに、すけつねがちやくし犬坊
 と申すわつぱ、いづくからかはきたりけん、
 時宗を見るよりも、こえもおしまずわつ
 となき、もつたるあふぎにて、ときむねが
 おもてをちやうくとぞうたりける。時宗
 これを見、につことわらひあふ。「ゆゑしくも
 うつ犬坊かな。うらやましやな。なんぢハ、夕べ
 父をうたせつゝ、けさ手にかけてうつこ
 とよ。かなしきかなやわれは、五つや三
 つの年よりも、父をなんぢがおやにうた
 せ、野にふし山にかくれて、心をつく
 し、きもをけし、つゞやはたちにあまつ
 て、うちけるだにもうれしきに、さこそ
 犬坊が、心もつくさずをこのけなくうつを、
 うれしくおもふらん。これも君の御おんぞや。
 わどのがうでにかなふまじ。うつてはらだ
 にいるならば、いかほどもうてや、犬坊」と、
 ふりあげてうたせけり。

御前なりし人々、「弓取に

たうざの恥辱を

あたうる事、もつたいなし」と申て、

犬坊を

(抱)(入)
いだきいるゝ。

(下・絵二)

(下・詞三)

かゝりける所に、二たんの四郎たゞつな、すけ
 成)の首、太刀の切さきにつらぬいて、御
 前)にまいらせあぐる。頼朝、首を御つけん
 あり。あらむざんや時宗、今までハかうの
 (眼)見張(悪)まなこをみはつて、わろびれざりし
 (姿)(交)がたもかはり、涙をながし、かうべを地に
 つけ、「あらいたハしや、はやくもかはりたまひ
 けるや。竹馬にむちをうちしより、此方
 (一)(起)(伏)ひと所にをきふして、へんじもみえさせ
 たまハねば、とやましますらん、かくやわたらせ
 たまふらんと、心をそへておもひしに、かな
 しきかなや今ははや、五たい分別つゞ
 かねば、ありしかたちもかはりはて、いたづ
 事)らごとくなりけり。とくして我もかくなりて、
 (同)おなじ道に」とおもひければ、つゝめどこぼる
 (涙)るなみだハ、庭のしらすもぬれぬべし。

(下・絵三)

(下・詞四)

時宗が太刀を取出し、「これにてきれ」と
 の御ぢやうなり。時宗、これ見、「あらふし
 ぎや。此太刀はおととし京へのぼりし
 時、四条町にてかひ取、今夜ようちも
 これにてうつ。我等がくびも此太刀にて、き
 られんことのふしぎや」と、申せし事は、
 此太刀の出処をかくさんためのことば成。
 去間、「時宗をばたかとおかにてきれ」との
 上意なりとて、時宗をひつたて、たか、
 おかへぞいそぎける。「たゞ、よのつねのめし
 うどだにも、さいごのていハ面白し。大強一の
 時宗が最後をみん」といふまゝに、貴賤
 群集をなしにけり。時宗、人の多きをみ
 て、「あゝら、口をしや。かほどのくわうざにて、
 (及)におよぶ事よ。よし／＼夫も時宗が、山賊海賊
 をしたる身にてもあらばこそ。父母きやうやう
 のそのために、ついたるなわにて
 有あいだ、神の前にて
 (御注連縄)みしめなは、
 佛のまへにて
 (善)ぜん(綱)のつな、経のひぼ
 (言)ともいひつべし。心
 あらん弓取達ハ、よつて
 (手懸)てかけ

て結縁せよ、人ぐ」と言

まゝに、あう、たかどをかへ

ぞいそぎ

ける。

(下・絵四)

(下・詞五)

たかどをかにもつきしかば、九品の松の

下にしがわをしかせなをりけり。時宗、心

におもふやう、「此松の下にてきられん事ハ、

ひとへに九品のじやうど、おもふなり。い

かに太刀取、なわとりも、すこしのいとまを

たひたまへ。時宗が最期に、じやうどの

三部經を、あら／＼だんじてきかせ申

さん。それほつけ一ぜうのくりきはたつ

とし。有がたきみだゑしやうぼうまんどく

のくらしい、三世諸佛出世ノ本懷ハ衆生

成佛の直道なり。ぐちなるしゆじやう

にいたりてハ、かうじやうのほうもんなり。

座ぜんしゆぎやうのでん地にいたりたき

者ハ、六宗をせうしてごくらくにおふじやう

す。一指を捧る其ときハ、大せんせかいもこゝ

にあり。たけをうつ、たうを見て、悟道する

事ふんみやうなり。めうらく大師の御しやく

にいわく、しよきやうしよさん、たざいみだ、さい

ほうおもつてさきとせり。ゆいしんのみだ、さい

こしんのじやうどなれば、ほんらいむとうざい、

何所有南北とくわんずべし。それ六字

みやうがうを集るきやうろんハ、けごんきやう

にて南の字をつくり、阿含經にて無の

字を作り、方等經にて阿の字を造り、

大般若にて弥の字を造り、法花經を

もつて陀の字をつくつて、南無阿弥陀仏

と申なり。十方三世佛、一切諸菩薩、

八万しよせうぎやう、皆是阿弥陀」ととく

時ハ、聴聞の老若、かうべを

かたむけ、時宗を

おがまぬ人は

なかりけり。

(下・絵五)

(下・詞六)

彼時宗と申ハ、おさなかりける時よりも、

勤行をこたらず。一心三觀の月ハ、無明の

暗をてらし、くわんねんのまどの前にハ、ま

ゆに八字の霜をたれ、一實中道の

くるまハ、無二無三の門に轟、一乗菩提の

こまハ、びやうどう大ゑの苑に嘶。等がく

一てんの時鳥ハ、みやうがく大ぜうのみねに
 (鳴) (転) (妙) (驚) (乗) (峰)
 なく。入重玄門のうぐひすは、げゝ衆生
 (谷) (轉) (驚) (下化) (衆生)
 のたにゝさへづり、しよぎやうむぢやうの
 (生) (生) (減) (法) (寂)
 春の花は、是しやうめつぼうの風に
 (散) (生) (減) (寂)
 ちり、せうめつ、己の秋の月ハ、ぢやく
 (滅) (為) (樂) (隔) (萬) (山)
 めついらくの雲にかくるゝ。ばんざんに
 ふんくし、かくのごとくであるものを。「たゞ
 (念) (仏) (及) (及) (及)
 ねんぶつを申べし」と、およぶもおよばざ
 りけるも、みなねんぶつを申けり。
 是ハ、たかをかにての事。さても君の
 (鷹) (岡) (殿) (訴訟)
 御前には、わだ、ち、ぶ、北条どの、そせう申
 (和) (秩) (殿) (訴訟)
 されけるやうハ、「かの時宗と申ハ、大かう一の
 (兵) (助) (者) (剛)
 つわものなり。又ハ名にあるものゝ子孫
 (助) (思) (召) (内)
 申されたりければ、頼朝もなひく
 (助) (思) (思) (召) (身)
 たすけたくおほしめさるゝ折から、此人々
 (安堵) (遊) (身)
 訴訟の旨うれしくおほしめされ、自身
 (下) (走) (鷹) (着) (父) (父)
 あんどの御状をあそばし、甚平右馬尉
 (下) (走) (鷹) (着) (父) (父)
 にくださるゝ。御所、甚平右馬尉、たて文
 持てはしり、たか、岡にもつきしかば、「其
 (斬) (斬) (和) (秩) (父) (父)
 時宗、なきつそ。子細あり。わだ、ち、ぶ、
 (衆) (衆) (衆) (衆) (衆) (衆)
 北重殿、君へ申させたまひて、助たま
 (衆) (衆) (衆) (衆) (衆) (衆)
 はん御教書のあり。これく、おがみ候へ」と
 (衆) (衆) (衆) (衆) (衆) (衆)
 時宗がひさにをく。こてのなわをゆる
 (衆) (衆) (衆) (衆) (衆) (衆)
 されて、たからかにこそようだりけれ。

「下状、さがみの国の住人、そがの五郎時宗
 (相模) (會我) (過) (転) (忠)
 はやくくわんゆうす。夫、くわをてんじて、忠と
 (信) (仰) (親) (親) (親) (親)
 なす。しんかうハ人にあつて、しかもみやうの
 (知見) (知見) (知見) (知見) (知見) (知見)
 ちけんたり。おやに孝のふかきものは
 天道のたすけ有。是によつて頼朝
 も憐愍をはげまし、非をいたして理
 になせり。天下こゝにかんをうす。そくばく
 (刀) (劍) (涙) (悲)
 の弓取、たうけんをさしおき、なんだ袖
 (濕) (遠) (近) (悲)
 をうるをうし、おんごんにきくもの、ひる
 (肝) (銘) (誅) (誅)
 いきもにめいじたり。これをさらにちう
 (罰) (死) (罪) (丁) (箕) (裘)
 ばつし、しざいになしをはんなば、きうう
 (家) (絶) (絶) (絶) (絶) (絶)
 のいゑたえ、弓馬の道ハながくすた
 (家) (絶) (絶) (絶) (絶) (絶)
 りなん。あおいでもなをあまりあり。
 (焚) (燬) (燬) (燬) (燬) (燬)
 はんくわいにくらぶれば、時宗ハまされ
 (張) (張) (張) (張) (張) (張)
 り。ちやうりやうにあハすれば、かうその
 (威) (勢) (威) (勢) (威) (勢)
 なせしいせりたり。一天四海のそのう
 (剛) (剛) (剛) (剛) (剛) (剛)
 ちにかくれぬかうのものなれば、先の
 非をかへして、今より後ハ、頼朝にちうしん
 (宇) (佐) (美) (忠) (忠) (忠)
 たるべし。本領なれば、うさみ、くづみ、か
 (津) (津) (津) (津) (津) (津)
 わづ、三かのしやう、ゑいたいあんどの御状
 (頼) (朝) (頼) (朝) (頼) (朝)
 如此。源のよりと判」とぞよみ
 (貴) (賤) (貴) (賤) (貴) (賤)
 あげける。きせん
 (上下) (上下) (上下) (上下) (上下) (上下)
 見聞衆、一度に
 (感) (感) (感) (感) (感) (感)
 あつとかんじつゝ

ゆゝしの人の
(果報)
くわほふやとよろ

こぼざるは

なかりけり。

(下・絵六)

(下・詞七)

去間、時宗ハ御教書いたゞき、泪をながし
つゝ、「あゝ、ありがたや。おなじくハ此御状
を舍兄(助成)すけなりもろともおがむと
だにおもひなば、いかゞはうれしかるべき
に、そ(惣領)うりやう(助成)のすけなり、今はうき世
におハせねば、時宗ひとりながらへて、
惣領をつぐともいきたるしある
まじい。たゞ／＼切らせたまへ」と申(を)こう
てぞ、き(斬)られける。見る人目をおどろ
かし、きくものこれ(感)をかんじけり。頼朝「あ
はれ」とおぼしめし、「かほどかふなるつわもの、
(上)古
しやうこも今も末代もためしすくなき
ゆへなり。あら人神に(現)いわへ」とてふ(富士)じ(裾)のす
そのにやしろをたてゝて、あにの宮・おと(兄)の宮
と申てい(斎)わゝせたまひけるとかや。今たうだ
るにいたるまでおや(親)のかたき(敵)をうつ人、

(下・絵七)

(下・詞八)

このやしろ(社)にて

いのれば

たちまち

かなえ

たまふ

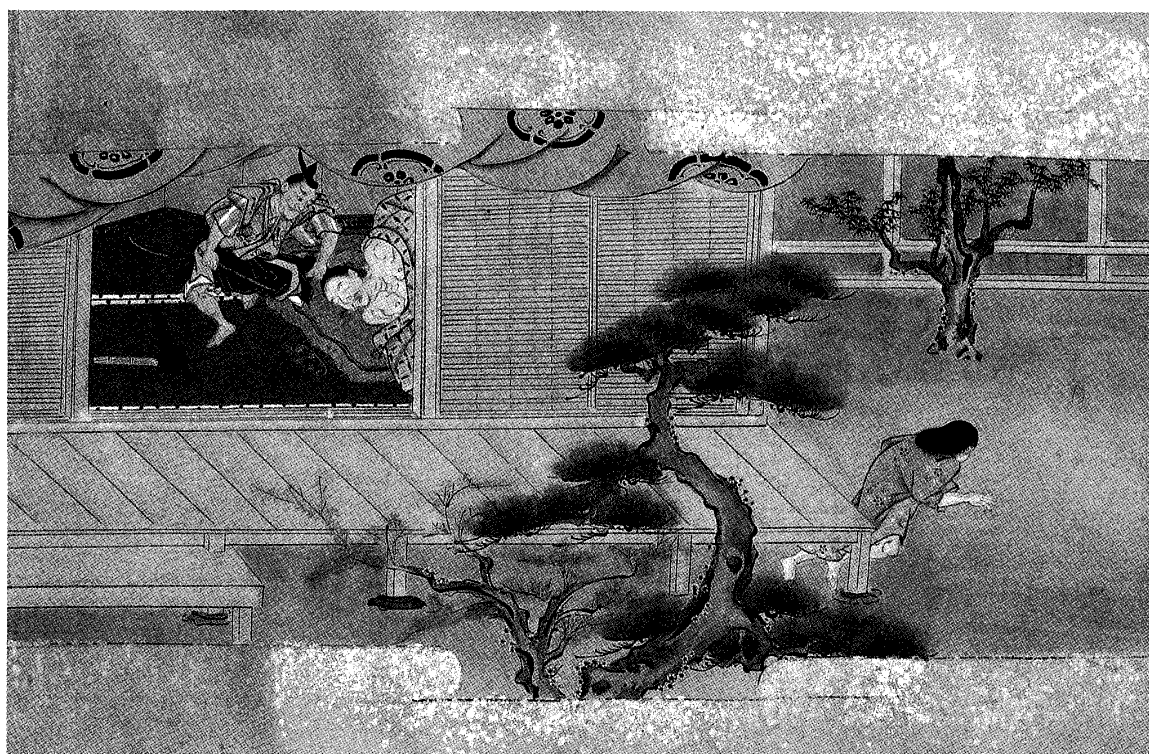
なり。

参考文献

須田悦生・田中文雅・服部幸造・佐藤彰変『寛永版舞の本』(三弥井書店、一九九〇年)
麻原美子・北原保雄校注『新日本古典文学大系 舞の本』(岩波書店、一九九四年七月)
三浦俊介『十番斬』(福田晃・眞鍋昌弘編『幸若舞曲研究 第九卷』(三弥井書店、一九九六年二月)所収)



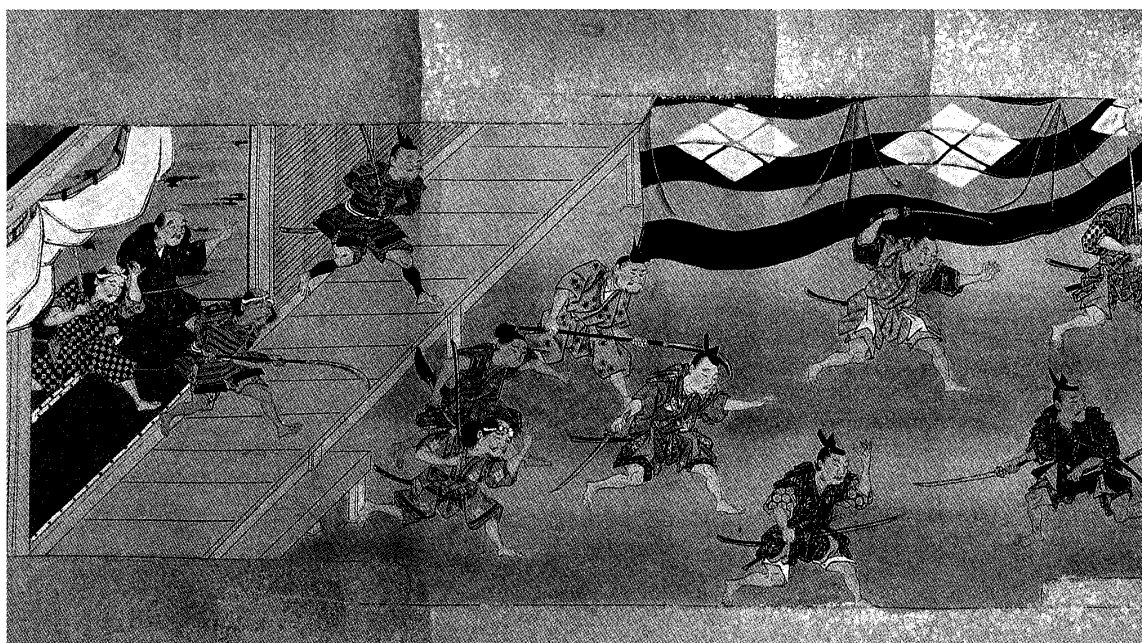
上・絵一



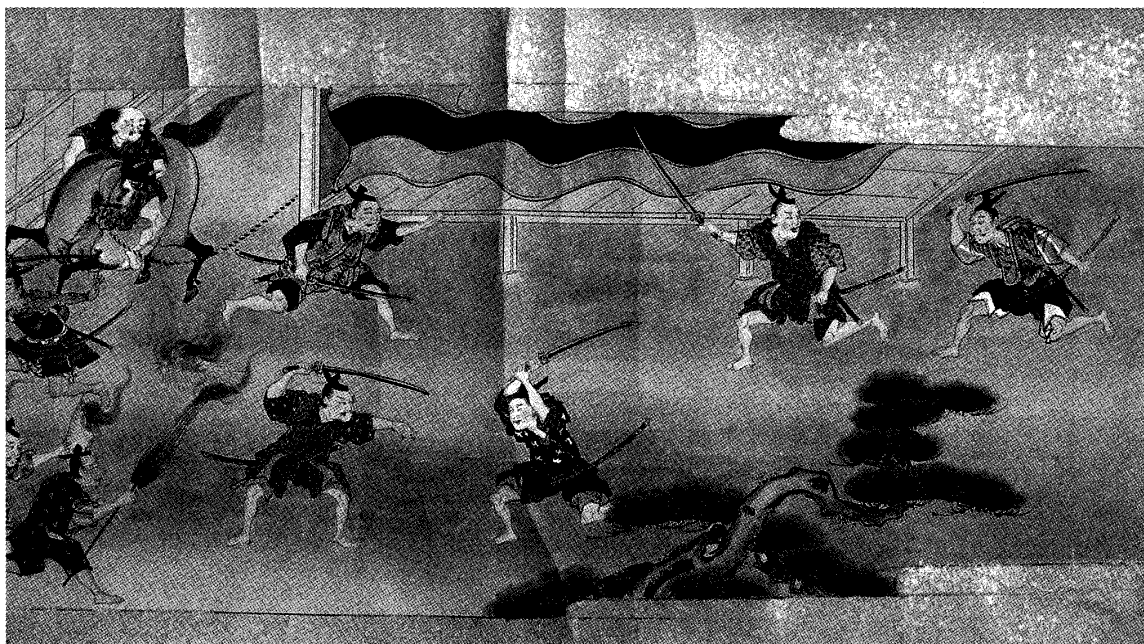
上・絵二



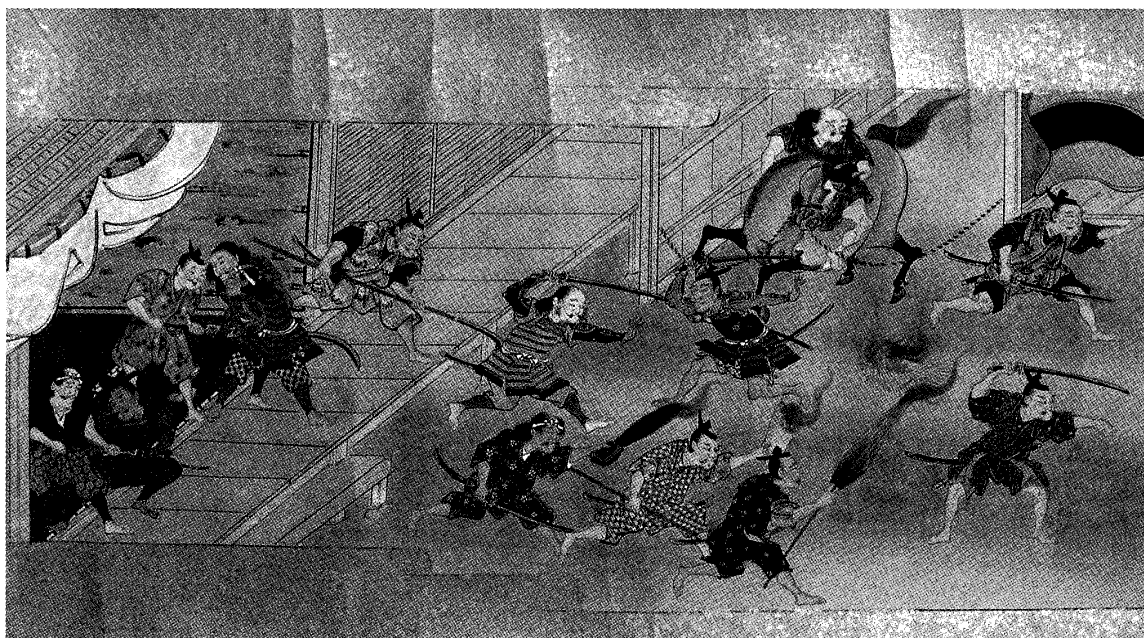
上・絵三（右）



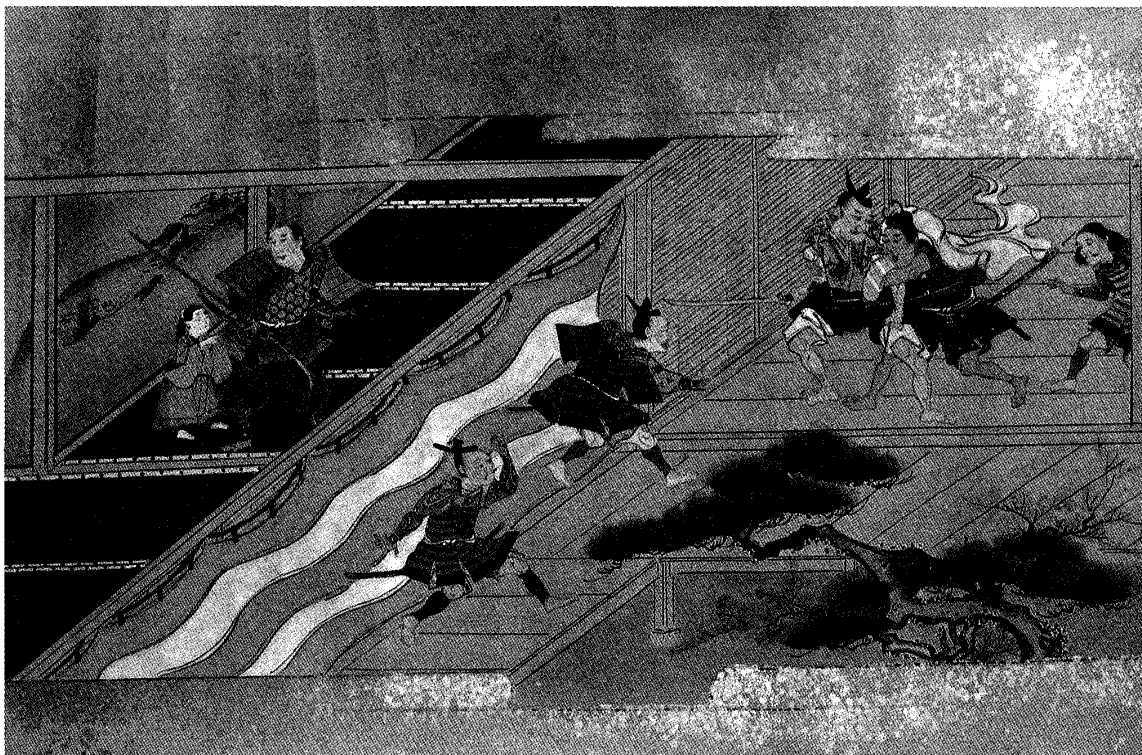
上・絵三（左）



上・絵四（右）



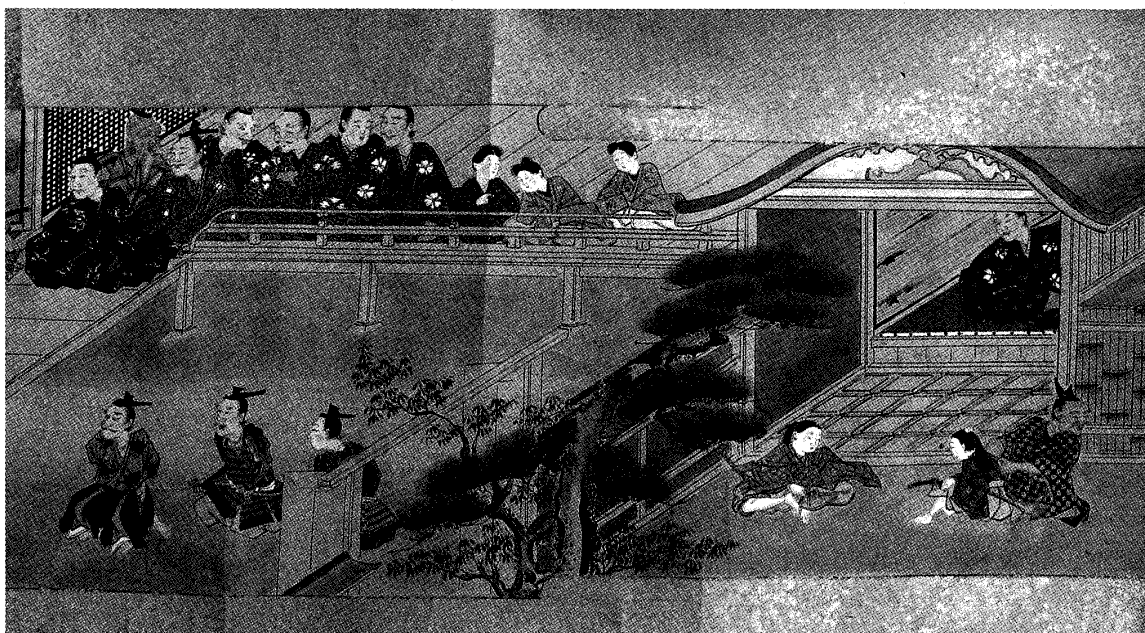
上・絵四（左）



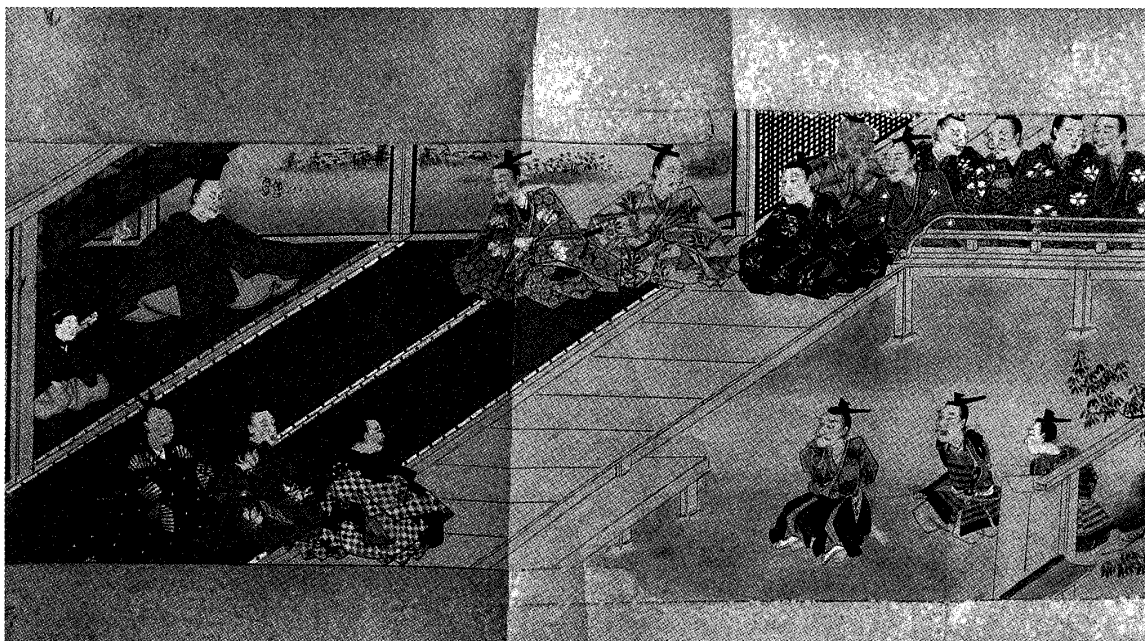
上・絵五



上・絵六



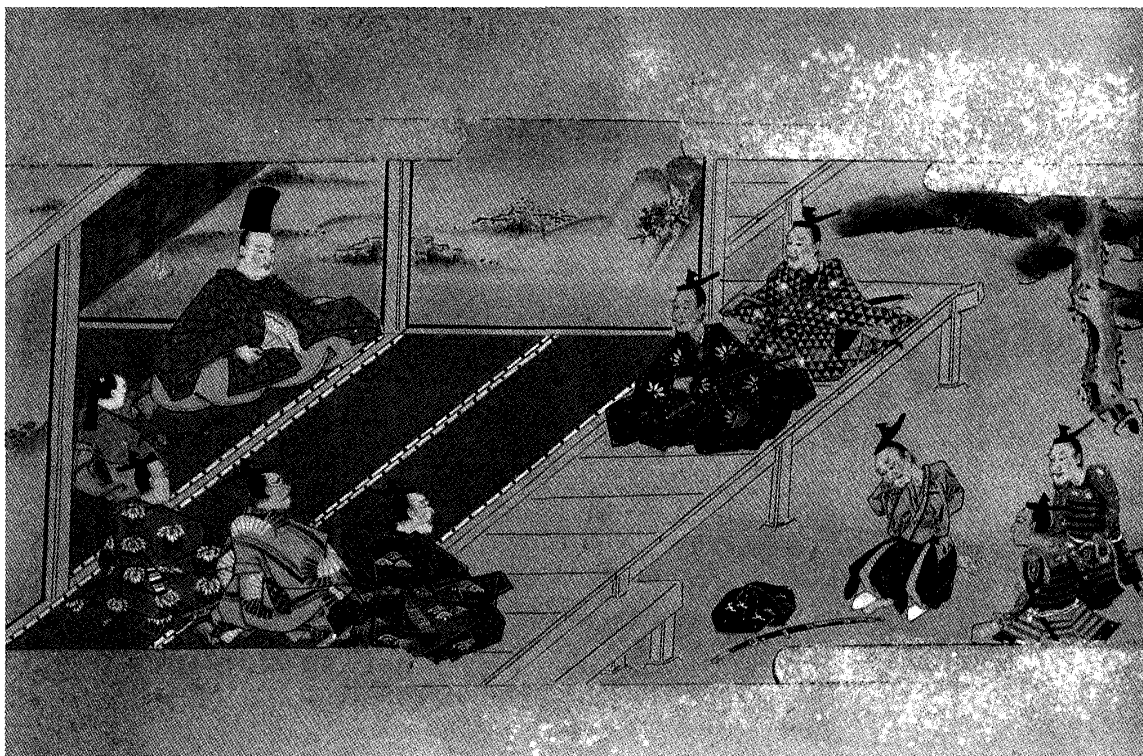
下・絵一（右）



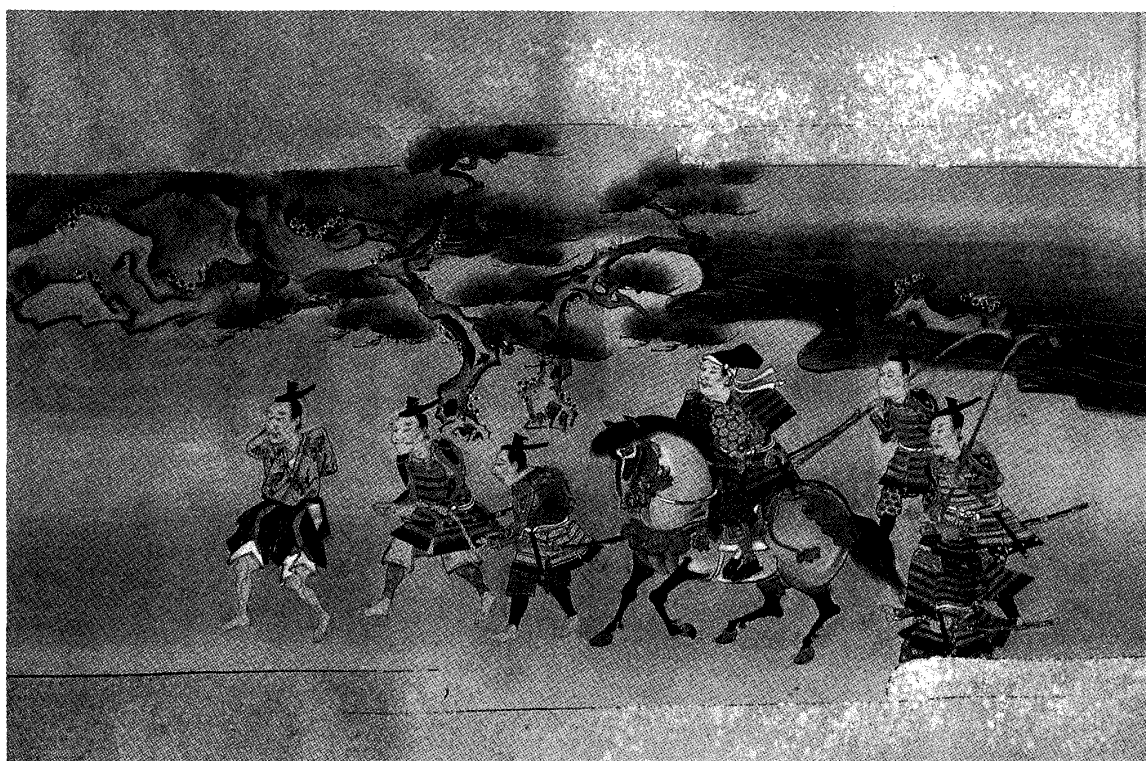
下・絵一（左）



下・絵二



下・絵三



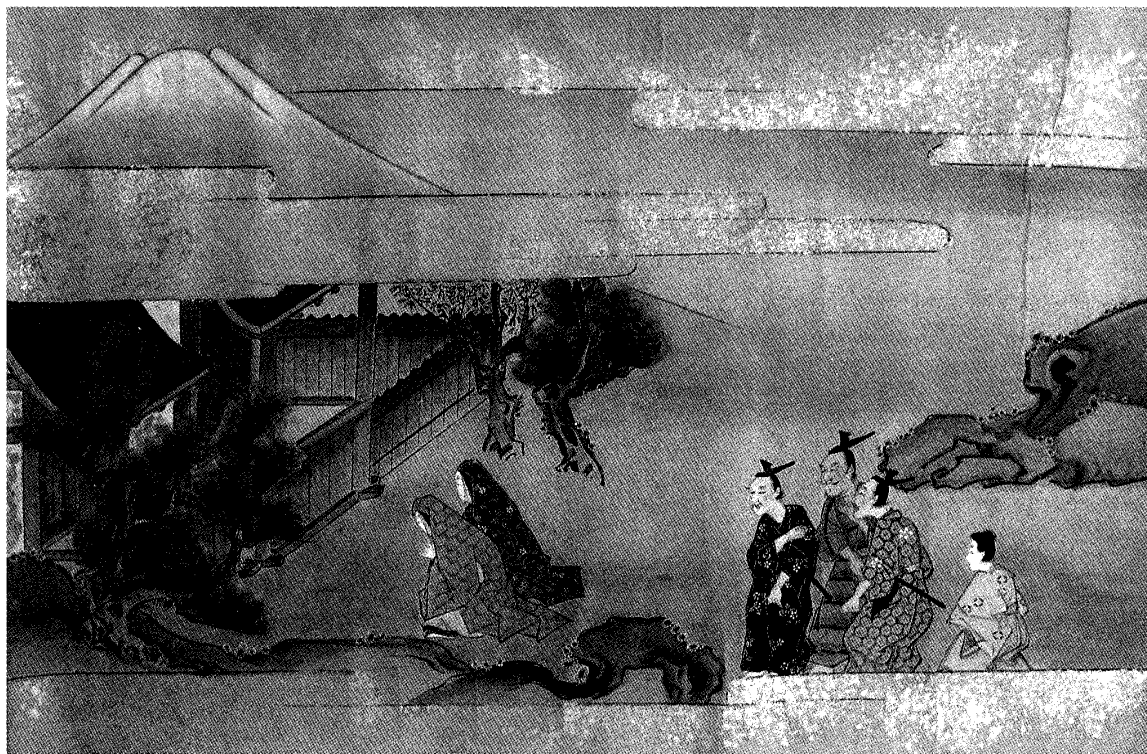
下・絵四



下・絵五



下・絵六



下・絵七